大事を思ひ立たん人は

（第五十九段）

要旨

出家入道を思い立つ者は、一切の世事を捨てて、すぐに実行しなければ、事を成し遂げられない。死はすぐにでも、我々の上にやってくるのだから、捨てにくいものでも捨ててしまわなければならない。

構成

段落	ページ・行	段意
第一段	初め～P三二・8〈過ぐめる。〉	出家入道を思い立つ者は、気にかかる一切の世事をすっかり捨てなければならない。あれこれ気にしていると、それらが尽きず、出家できなくなる。大体の人はこのような心積もりだけで一生を終わるようである。
第二段	P三二・9〈近き火などに〉～終わり	火事の際、なんでも捨て逃げるように、人の死もいつやってくるか分からないから、すべてを捨てるのがよい。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①大事（だいじ）を　思ひ立（おもひた）たん　人（ひと）は、　去（さ）りがたく、　心（こころ）に　かから
格助・対象　タ四・未　婉・体　係助・区別　形ク・用　格助・対象　ラ四・未

ん　ことの　本意（ほい）を　遂（と）げ　ず　して、　さながら　捨（す）つ　べき
婉・体　格助・体修　格助・対象　ガ下二・未　打・用　接助・単接　副　タ下二・終　適当・体

なり。　②しばし、　この　こと　果（は）て　て、　同（おな）じく　は　か
断・終　副　代　格助・体修　タ下二・用　接助・単接　形シク・用　係助・区別　代

の　こと　沙汰（さた）しおき　て、　しかしか　の　こと、　人（ひと）の
格助・体修　カ四・用（サ変・用＋補動）　接助・単接　副　格助・体修　格助・体修

嘲（あざけ）り　や　あら　ん、　行（ゆ）く末（すゑ）　難（なん）なく　したためまうけ　て、
ラ四・用　係助・疑問（係）　ラ変・未　推・体（結）　形ク・用　カ下二・用　接助・単接

年（とし）ごろ　も　あれ　ば　こそ　あれ、　その　こと　待た
副　係助・強意　ラ変・已　接助・順理　係助・強意（係）　ラ変・已（結）　代　格助・体修　タ四・未

ん、　ほど　あら　じ、　もの騒（さわ）がしから　ぬ　やうに　など　思（おも）は　ん
意・用　ラ変・未　打推・用　形シク・未　打・体　比・用　副助・引用　八四・未　婉・体

に　は、　え　さら　ぬ　こと　のみ　いとど　重（かさ）なり　て、　こと
接助・単接　係助・区別　副　ラ四・未　打・体　副助・限定　副　ラ四・用　接助・単接

の　尽（つ）くる　限（かぎ）り　も　なく、　思（おも）ひ立つ　日（ひ）も　ある　べから　ず。
格助・主格　カ下二・体　係助・並列　形ク・用　タ四・体　係助・並列　ラ変・体　当・未　打・終

③おほやう、　人（ひと）を　見（み）る　に、　少（すこ）し　心（こころ）ある　きは　は、　みな
副　格助・対象　マ上一・体　接助・単接　副　ラ変・体　係助・提示　副

この　あらまし　にて　ぞ　一期（いちご）は　過（す）ぐ　める。
代　格助・体修　格助・状態　係助・強意（係）　係助・強意　ガ上二・終　婉・体（結）

①仏道に入り、悟りを開くことを決心するような人は、心から離れず、気にかかることの、かねてからの望みを成し遂げることをしないで、そっくりそのまま捨て去るべきである。②しばらく（待って）、このことが終わって（からにしよう）、同じことなら、あのことを処理して（からにしよう）、これこれのことについては、他人が嘲笑するだろう、将来、非難のないよう前もって処置しておいて（からにしよう）、長年の間こうして何事もなく過ごしてきたのだから、そのこと（の終わるの）を待とう、長くはかかるまい、あわて騒がないようにして（からにしよう）などと思うようでは、避けられないことばかりがますます重なって、それらの用事がなくなる際限もなく、（出家を）決心する日もあるはずがない。③大体において、（世の中の）人を見ると、少しだけの（出家・入道の）志ある人々は、みんなこのような心積もりだけで一生が過ぎてしまうようである。

④近き　火　など　に　逃ぐる　人　は、「しばし。」と　や
形ク・体　副助・例示　格助・理由　ガ下二・体　係助・提示　副　格助・引用　係助・疑問(係)

言ふ。　⑤身　を　助け　ん　と　すれ　ば、　恥　を　も
ハ四・体(結)　格助・対象　カ下二・未　意・終　格助・引用　サ変・已　接助・順恒　格助・対象　係助・並列

顧み　ず、　財　を　も　捨て　て　逃れ去る　ぞ　かし。
マ上二・未　打・用　格助・対象　係助・並列　タ下二・用　接助・単接　ラ四・終　係助・強意　終助・念押

⑥命　は　人　を　待つ　もの　かは。　⑦無常　の　来る　こと
係助・提示　格助・対象　タ四・体　係助・反語　格助・主格　ラ四・体

は、　水　火　の　攻むる　より　も　速やかに、　逃れがたき
係助・提示　格助・主格　マ下二・体　格助・比基　係助・強意　形動ナリ・用　形ク・体

ものを、　その　とき、　老い　たる　親、　いときなき　子、　君　の
接助・逆確　代　格助・体修　ヤ上二・用　完・体　形ク・体　格助・体修

恩、　人　の　情け、　捨てがたし　とて　捨て　ざら　ん　や。
格助・体修　形ク・終　格助・引用　タ下二・未　打・未　推・終　係助・反語

④近所の火事などで逃げる人は、「しばらく（待ってから逃げよう）。」と言うだろうか（いや、言わない）。⑤自分の身を助けようとすれば、恥をも顧みないで、財宝をも投げ捨て逃げ去ることになる。⑥（人の）命は人（の気持ち）を待ってくれるだろうか（いや、待ってはくれない）。⑦死のやってくることは、水や火の災難が襲いかかるよりも速くて、逃げ去ることはできないものなのに、そのときになって、年老いている親、幼い子供、主君から受けた恩、他人の好意などを、捨てにくいといって捨てないだろうか（いや、捨てるに違いない）。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶「大事を思ひ立つ」ことを妨げるものを整理させ、まとめさせる。知技(1)ウ・(2)イウ 思判表B(1)ア →「学習のポイント」1

❷「少し心あるきは」とは、どのような人か、話し合わせる。知技(1)エ 思判表B(1)ウ →「学習のポイント」2

❸本文中の近所の火事の例の表現上の効果について考えさせる。知技(1)ア・(2)エ 思判表B(1)イ →「言葉と表現」1

❹「少し心あるきは」はなぜ「みなこのあらましにぞ一期は過ぐめる」のか、考えさせる。思判表B(1)オ 主態 →「言語活動」1

展開

❶第一段落の現代語訳をもとにして、妨げるものをまとめる。同じようなことを言い換えている場合もあるので、そのようなものはまとめて、二点に絞らせる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストで確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、各自に現代語訳をさせることによって、各部分のつながりを意識し、なめらかな現代語訳になっているか、確認する。

❷「大事を思ひ立たん人」と対照されていることに留意させる。「少し」という語の意味をきちんと捉え、志が弱い人であることに気付かせる。何人かの意見の交換の中でまとめられるとよい。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・「少し心あるきは」について、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価しているか、意見交換によって確認する。

❸第二段落の現代語訳を参考にし、火事の例がどのようなことを示そうとしているかを考え、効果について考える。第二段落にあげられている例が作者の主張に果たしている役割を考えさせ、作者の論理を支えていることに留意させる。その際に火事の例のどの部分が最後の一文のどの部分と対応しているのかを整理するとよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。
・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。
・どのような論理構造になっているかについて、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を理解できているか、ノートにまとめさせて、確認する。
❹❷で考えた「少し心あるきは」がどのように行動するかを想像して、「このあらまし」の内容と合わせることによって「一期は過ぐめる」理由を考えて行く。作者の主張を支持するか、支持しないかを考えさせ、二つのグループに分かれて討論させる。その際に、「大事を思ひ立たん人」と「少し心あるきは」との違いを意識して作者の主張を理解するように心がける。

【評価】作者の主張について、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めているか、グループ討論によって確認する。
・進んで『徒然草』に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え学習課題に沿って、作者の主張がもっとも表れている一文を読み取ろうとしているか、グループ討論をさせ、相手の主張を正しく受け取っているか、論理的に反論しているかを分析する。

指導上の注意点と発問例

●二二ページ

問 **[易]「大事」（2行目）とは、ここではどういうことを意味しているか。**

答 仏道に入り、悟りを開くこと。

問 **[難]「大事」とは、仏教で言う「一大事」であるが、具体的にはどういう意味の言葉か。**

答 仏がこの世に出現する目的である一切衆生を救済すること。

問 **「さながら」（3行目）のここでの意味は次のうちのどれか。**

アそっくりそのまま　イすっかり　ウあたかも　エ全然

答 ア

問 **「大事を思ひ立たん人は、…捨つべきなり。」（2行目）と主張する根拠または理由と見られる部分を書き抜け。**

答 命は人を待つものかは。無常の来ることは、水火の攻むるよりも速やかに、逃れがたきものを（10行目）

問 **「沙汰」（3行目）の意味を、次の中から選べ。**

ア議論して決めること。判定。イ相談すること。評議。ウ命令すること。指図。エ処理すること。始末。

答 エ

語句の研究

●二二ページ

2大事　人の一生のもっとも大事なこと。ここでは、仏道に入り、悟りを開くこと。それまでの世俗の生活を捨てるということであり、まさしく人生の一大事である。

2思ひ立たん人　「思ひ立つ」は「決心する」「発心する」意。決心したことを実行する過程も含めて言う語。

2去りがたく　「去る」は自動詞で、「去りがたく」は「（心から）離れず」の意。下の「心にかからんこと」を限定する語である。

3さながら　「然ながら」の意。そのまま手をつけないで、ということ。

3しばし、このこと果てて　「しばし」は「しばらく待とう」の意。「果てて」の後には「出家しよう」などの語句を補って読むとよい。「沙汰しおきて」「したためまうけて」「もの騒がしからぬやうに」の後にも、同様に補うことができる。

3同じくは　「同じく」は形容詞の連用形、「は」係助詞。「同じことなら」「どうせ…するなら」という意で副詞的に用いられる。

3沙汰しおきて　「沙汰す」は「処置する、始末をつける」の意。補助動詞「おく」が付いて、「処置しておいてから」の意になる。

4したためまうけて　「したたむ」は「処置する・整理する」の意で、「まうく」は「前もって準備する」の意の複合動詞。上の「行く末難なく」を受けて、「非難されることの無いように準備する」のである。

5年ごろもあればこそあれ　「長年の間こうして何事もなく過ごしてきたのだから」の意か。この箇所には幾つかの解釈がなされている。教科書の脚注のような考え方の他に、「長い年月がかかるのでは困るが」「長年、このようにやってきたのに」と解釈する説などがある。

5ほどあらじ　「ほど」は時間の長さの程度を表す。「あらじ」の「あり」は「経過する」「すぎる」の意。

5もの騒がしからぬやうに　「もの騒がし」は、ここでは、「せっかちだ」「気が早い」「あわただしい」の意。

6えさらぬ　「え…打消」は副詞の呼応である。「さらぬ」を、ここでは、「避る」と解したが、「去りがたく」の「去り」と同様に解して、「我が身から離れない」とする

問 **次の「や」を文法上から説明せよ。**
(1)人の嘲りやあらん（4行目）
(2)「しばし。」とや言ふ。（9行目）
(3)捨てがたしとて捨てざらんや。（12行目）

答 (1)疑問の係助詞。(2)反語の係助詞。(3)反語の係助詞。

問 ◉**「…など思はんには」（6行目）とあるが、思うことの具体的な内容を抜き出せ。**

答 「しばし、このこと果てて」（3行目）、「同じくはかのこと沙汰しおきて」（3行目）、「しかしかのこと、…行く末難なくしたためまうけて」（4行目）、「年ごろも…もの騒がしからぬやうに」（5行目）。

問 **次の部分の下に補うべき共通した言葉を示せ。**
(1)「しばし、このこと果てて」（3行目）
(2)「沙汰しおきて」（3～4行目）(3)「したためまうけて」（4行目）(4)「もの騒がしからぬやうに」（5～6行目）

答 「大事を思ひ立たん」（2行目）

問 **「えさらぬ」（6行目）について、**
(1)文法的に説明せよ。
(2)分かりやすく言い換えよ。

答 (1)→品詞分解参照。(2)避けることのできない。

問 **「人を見るに」（7行目）の「に」の働きは、どのようなものか。**

答 単純な接続を示し、後に述べる事柄が起こる状況を示している。

補 接続助詞の「に」であるが、単純な接続のほかに、原因・理由を示す順接の働きや逆説の働きなども示す。この場合は「…と」「たら」と現代語訳する。

問 **「少し心あるきは」（7行目）とは、どのような人か。**

答 少し道理の分かるような人。少し出家の志のある人。

問 **「無常」（10行目）の「常」とは、どういう意味を持つ語か。**

答 永久不変の意。

問 ◉**「無常」は、ここでは、どのような意味か。**

答 「死」を意味する。

補 「無常」は物事が絶えず移り変わっていく意の仏教語であるが、それを人生のこととし、「死」を表すことがある。ここはその用法。直前の「命は人を待つものかは。」が参考になる。

考え方もある。

6ことの尽くる限り　「こと」は「心にかからんこと」「かのこと」「しかしかのこと」「そのこと」などとある、さまざまな用事のことである。

7思ひ立つ日大事　（出家）を「思ひ立つ日」の意。

7少し心あるきは　「心」は出家しようとする心である「きは」は「際」でその程度の人の意。強い決意ではなく。少しの軽い気持ちから出家しようと思っている人々のことを指している。

8このあらまし　「あらまし」は心に予測すること、将来の心あてのこと。「このあらまし」とは、すべての用事を済ませたうえで、出家しようと思う心の在り方（心積もり）を言う。

8一期　一生、生涯。人間のこの世に存在する間

9近き火などに　「近き火」は自分の家の近くの火事。「に」は原因を示す。

9しばし　三二ページ・3の「しばし」と同じ。下に「待たん」などを補って考える。

10命は人を待つものかは　人の命が尽きる時に、しばらく待ってくれという人の気持ち

を聞き入れて、待ってくれるだろうか、いや、待ってはくれない。「かは」は反語。

10 無常　ここでは死の意。

10 捨てがたしとて捨てざらんや　捨てにくいといって捨てないだろうか（いや捨てる）。「や」は反語の助詞。

キー・ポイント　中世の文学思想を代表するのが無常観といわれる。戦乱の中での命のはかなさ、人生のむなしさを実感した人々が、仏教からの影響もあり、無常を文学のテーマにするようになった。本来、万物流転の様相を表す語だが、より直接的に人の生死としての文学の中でとらえられることも多くなっていった。「徒然草」にも第四十一段をはじめ、無常観の扱われている章段が少なくない。

鑑賞

様々な内容を含む「徒然草」の中で、兼好の思想の核を形成する、無常迅速という認識を根底に据えた、道念についての論である。これに類する章段としては、他に「老来りて、始めて道を行ぜんと待つことなかれ」（第四十九段）、「寸陰惜しむ人なし」（第百八段）、「明日は遠き国へ赴くべしと聞かん人に、心閑かになすべからんわざをば、人言ひかけてんや」（第百十二段）、「ある者、子を法師になして」（第百八十八段）などがある。これらのうち、第百八段・第百十二段・第百八十八段などは、例話や比喩をまず語っておいて、それから本論を展開するという形式をとっているのに対して、本段や第四十九段は、冒頭から主張を前面に押し出し、その後に例話や比喩を述べて、主張の支えとするという形式をとっている。議論の進め方、論説文の書き方としては、当然この両様が考えられるわけで、これら主題を同じくする他の章段と読み比べて、それぞれの表現効果を考えてみることもおもしろいであろう。最初に例話や比喩を語って、次第に本論に進むやり方は、説得力の大きい議論の進め方であるが、最初から言わんとすることを断定的に言ってしまうスタイルは、聴衆や読者に衝撃を与え、その気持ちを一気に話し手又は書き手に集中させ、更に共感へと呼び込むという効果を持っていると考える。

本段での、「近き火などに逃ぐる人は、『しばし。』とや言ふ。」という、火事の比喩は、無常迅速の理を説く上で極めて分かりやすく、効果的なものである。そして恐らく、「法華経」譬喩品第三に説く火宅の譬（三車一車）とも無関係ではないと思われる。